

● シリーズ 私の見た日本 Vol.198

「日本らしさ」とその美しい感覚について

Vanessa LIN (ヴァネッサ リン)

フランス・パリ出身。フランス国立パリ・ラヴィレット建築大学で修士号を取得。現在、九州大学大学院芸術工学府に交換留学生として在籍している。岩元真明研究室に所属し、建築や木の文化を研究している。



私の日本への入国は2020年9月を予定していたが、COVID-19の影響で3カ月遅れとなってしまった。入国後の2週間の隔離生活も辛いものがあったが、せっかく憧れの国に来たので早く日本の文化や風景を体感したいと思いながら胸を膨らませていた。最初に困難はあったものの、日本の生活習慣に馴染むことで充実した生活を送っている。

「日本に来ようと思った理由は?」と初めて会う日本人によく聞かれるが、いつも答えるのが難しい。しかし、改めて考えてみると日本は私にとって身近な国であったことに気づく。両親は共に中国出身のため、幼い頃から同じアジアである日本の文化を知る機会が多く、どこか親しみを感じていた。また、私自身はフランスで生まれ育ったため芸術に対する関心は高い。大学で建築を専攻することで木構造に魅力を感じ、調べていくうちに日本には伝統的な木の文化と木造建築、さらに現代建築にも独特な魅力があることを知った。木への興味はいつの間にか日本に留学する理由に変わっていったのだ。

本稿では私から見た「日本らしさ」について述べたいと思う。まずは、ある日本語をキーワードに、洗練された日本の美意識とその特徴についてまとめる。次に、素材の性質を生かして再利用したデザインの美しさについて、私のプロジェクトと共に紹介する。最後にこれらの「日本らしさ」が現代の空間や都市な

ど、大きなスケールでも体感できるのかを考察する。

洗練された日本の美意識

来日するまでの日本のイメージは、寺社仏閣などの木造建築、茶道や華道などの精神性を重視した儀式や芸術、和紙や布を使った工芸品など、ほとんどが視覚的なものであった。そんな私が日本文化に対する認識を深めたきっかけは、旅と出会いである。日本全国の魅力的な建築や都市を見てまわり、ローカルな村や自然にも訪れることができた。旅で体験した文化は本で見るとより深く、とても感動的なものであった。しかし、一番感動したのは人の良さだ。彼らの優しさや他人に対する敬意にいつも驚かされる。時間が経つにつれて、これこそがこの国の特徴だと思うようになってきた。人に対してだけでなく、あらゆるものに対して敬意を払う姿勢は素晴らしいと感じる。この姿勢が日本人の表現の奥深さにつながっているのだと思う。

ここからは日本文化の視覚的な特徴だけでなく、その中に存在する日本の美意識について考えたい。私は特に「まかない」と「見立て」という言葉の概念に魅力を感じている。この2つの言葉は正に日本の美意識の独特な特徴を言い表すことができる。「まかない」とは、代用して即興的に間に合わせることだ。例えば、建築現場では大工たちがあり合わせの

材料で作業台をまかなっていたりする。他にも、今は使われなくなった陶製の手榴弾を花器としてまかなった例を見た。このように、一見役に立たないようなものを代用して美しいものに変換する感性に日本らしさを感じる。一方、「まかない」と似ているようで少し違う「見立て」とは、対象を他の物に喩えて表現することを意味する。例えば、日本庭園の枯山水は「見立て」の技法が使われている。建築分野に限らず、日本で広く認知されている妖怪も「見立て」の一種である。人や動物が化けることもあれば壁や布などの無機物が化けることもあり、豊かな想像力で補完することで現実と幻想を共存させているようだ。そこには全てを理屈で説明できない、日本人が長年培ってきたであろう感覚が存在する。日本に来るまでは、表現が非常に奥深いためその感覚を十分に理解することは難しいと思っていた。しかし、この2つの言葉に出会うことで私の日本文化への理解はさらに深いものとなったのだ。

再利用と豊かさ

私には金継ぎを趣味にしている日本人の友人がいる。欠けたり壊れたりした陶磁器を美しく再生させる行為に感銘を受け、私自身の創作活動にもその価値観の影響を受けた。再利用することで新しい価値を見出そうとした私のプロジェクトを2つ紹介する。



陶製の手榴弾を再利用した花器



作業機の継手



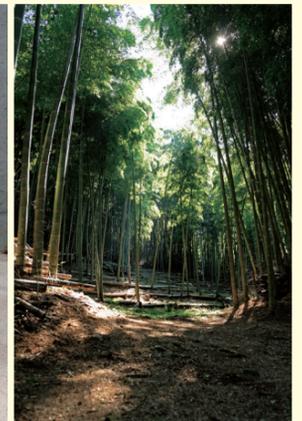
研究室の作業机



金継ぎ



竹構造の遊具



薩摩川内の竹林

私が所属する研究室の引越しによって、新しい作業机を設計することになった。使われなくなった木材を再利用することと、安価な素材を使用することが条件として与えられた。安価な材料はデザインの質を落とすとして通常は敬遠される。しかし、素材の特性を理解し、それを生かすことでデザインはより豊かになる。

また、鹿児島県の薩摩川内で行われたワークショップにも参加した。これは、様々な理由で維持が困難になった竹林を訪ね、新しい可能性を提案するというものだ。私のグループは子どもが中に入って遊べる竹構造の遊具を提案した。熱を加えると曲がるという特性と素材の軽さを利用してゆらゆらと動く。素材がどう変化できるのかを試したり竹の香りや手触り確かめることで、いかに子どもたちを楽しませることができるかを考えながらデザインした。これらのプロジェクトを通して、素材への敬意をさらに意識するようになった。素材と真摯に向き合い、そこに独自の価値を見出そうとする姿勢に日本らしさを感じる。

曖昧な空間と清潔な都市

ここからスケールを広げて、日本らしい空間について考察する。ここにも独特な感覚である「曖昧さ」が垣間見える。日本にはそれを表現する独自の空間がある。例えば「縁側」や「土間」である。このような、いわゆる中間領域は私にとって新鮮で興味深いものである。内側でも外側でもない空間は使用用途が曖昧になり、むしろ人々の自由な活動を促すのである。しかし、これらの中間領域は現代の住宅ではあまり用いられなくなってきているようである。

また、「清潔さ」という概念は「曖昧さ」を大切にしている伝統文化と現代の感覚の矛盾を言い表すことができる。例えば日本の伝統的な空間は陰影が曖昧に重なることで深みが増しているのに比べて、現代の日本の照明は均等に明るすぎるように思う。白く明るすぎる照明は空間を均一にし、物理的な空間と心理的な空間の差がなくなってしまう。そのため空間全てが清潔でなくてはならない。これが標準になると日本らしい陰影は現代から消えていくのではないだろうか。曖昧

な状態の美しさについて考える必要があると思う。

この「清潔さ」による均一化は、空間だけでなく都市にも影響を与えている。時間とともに渾沌としていくことは都市固有の魅力になっていくはずだが、COVID-19によってリアリティをもった「清潔さ」は都市をどのように変えていくのだろうか。「清潔さ」というのは無菌であることだけでなく、曖昧なものや雑多なものを排除することも意味する。つまり、今後の再開発によって都市の漂白が加速しないかと危惧しているのだ。私が育ったパリでは古い建物を改装することで街の個性を保っていることを考えると、すべてが新しくなくとも美しい街並みを形成することは可能だと分かる。確かに先述したような日本の美意識を感じられるものや場所は存在するが、現代の日本では古いものへの関心が薄れ、総じて新しいものが消費されているように思う。私が出会った日本らしい美しさがこれからも育っていくためにはどうしたらよいのだろうか。

(翻訳: 八坂怜央)



姫路の好古園



島原の武家屋敷跡



法隆寺の伝統的な木組